博士論文（要約）

現代的偏見に関する社会心理学的研究

東北大学大学院文学研究科
人間科学専攻　心理学専攻分野

山本 雄大

第 1 章 偏見の社会心理学

人類の歴史とは，他者との衝突の歴史である。そう言っても過言ではないほど，人々は自分たちと肌の色，信じる神，風習が異なるという理由によって，そうした性質を持った集団やそこに所属する他者との衝突を繰り返し，時には彼らの命さえも奪ってきた。では，なぜ，自分たちとは異なっているという理由だけで，人々は互いに対立しあうのであろうか。そうした対立の背景として仮定されてきたのが，偏見と呼ばれる心理活動である（Allport, 1954; Brown, 1995; Schmid, Tausch, Hewstone, Hughs, & Cairns, 2008）。このため，偏見は集団間の葛藤や対立を解決する糸口として注目され，社会心理学の領域において古くから研究の対象とされてきた（Brown, 1995）。

偏見研究の黎明期である 1930 年代から 1950 年代までを第一期とすると，この時代の研究は偏見を防衛機制の観点から概念化するものが多く（Ackerman & Johada, 1950; Dollardet et al., 1939; Zawadzki, 1948），偏見やそれに伴う行動反応である差別は欲求不満が攻撃行動に転化されたものとしてみなされた。しかしながら，偏見はそれを強く抱く人もいれば，それをほとんど抱かない人もいる（Altmeyer, 1998; Duckitt, 2006; Gaertner & Dovidio, 2005）。防衛機制はすべての個人に共通に備わっているメカニズムであるため，防衛機制に偏見生成の基盤を見出そうとする理論では，生成される偏見に個人差が生じる理由を十分に説明することができなかった（Duckitt, 2005）。また，偏見は社会的相互作用の中で生じるものである以上，人々が置かれている社会的文脈からの効果も加味しなければならないが，防衛機制論ではその点が考慮されることもなかった。

そこで，第二期の研究では，偏見を抱く人々のパーソナリティや彼らが置かれている社会的文脈の効果に注目した検討が行われるようになった。そして，右翼的権威主義的傾向や社会支配志向（Altmeyer, 1998; Sidanius & Pratto, 1999）などのパーソナリティを持つ人が強い偏見を抱きやすいこと，外集団との葛藤や資源をめぐる争いなどの社会的文脈下で偏見が生じやすいことなどが見出された。

1980 年代後半から始まった第三期の研究は，社会的認知過程，とりわけ，人間の社会的情報に対する自動的で非意識的な情報処理過程に偏見を生み出す原因を見出そうとするものであった。社会的認知を利用した研究から，偏見の生成における人間の非意識的な情報処理基盤の影響が明らかにされた。さらに，偏見は外集団やそこに所属する他者に対する負の感情を伴う反応というだけでなく，外集団に対する肯定的な感情や肯定的評価も含ん

だ複雑な心理反応として理論化されるようになった（Cottrell & Neuberg, 2005; Fiske et al., 2002）。そうした偏見内容の多元性を認識する中で展開されてきたのが，ステレオタイプ・コンテント・モデル（Fiske et al., 2002）や社会機能論的アプローチ（Cottrell & Neuberg, 2005）などである。

ステレオタイプ・コンテント・モデルは，人々が能力性と人間性の二次元から集団をステレオタイプ的に評価すると仮定し，その組み合わせによって対象集団に対して抱かれる感情や偏見が異なると主張する理論である。女性や老人など，能力は低いが温厚で親切など人間性が高く評価される集団には憐みが，ユダヤ人のように能力は高いが人間性が低く評価される集団には妬みや嫉妬といった感情が向けられることを明らかにした。社会的機能論アプローチでは，外集団からの脅威へ対処するための感情反応がその集団に対する偏見や差別の内容を特徴づけると仮定する。Cottrell & Neuberg（2005）は，人々が，健康に対する脅威とみなされる感染症患者に対しては恐怖感情によって回避行動を選択することを，過激な思想家のように社会秩序への脅威をもたらす集団に対しては嫌悪や怒りといった感情に基づいて排斥行為を行うことを見出した。

偏見研究が始まって以来，長らくその研究対象となってきたのは，異民族に対する否定的な感情を伴った偏見であった。偏見研究の嚆矢と呼ばれる『偏見の心理（The Nature of Prejudice）』（Allport, 1954 原谷・野村訳, 1968）も，アメリカにおける否定的な民族的偏見を念頭に書かれた書籍であった。1960 年代以降になると，女性の社会的地位向上を求める機運の高まりとともに，異民族に対する偏見に加えて，女性に対する否定的偏見も研究対象として取り上げられるようになったが（Jackman, 1994），それは民族間対立や女性差別など社会的関心の高い問題の解決に貢献できると期待されたためであった。しかし，現代社会には，肥満者，独身者，薬物やギャンブルに依存する人など，非生物学的な属性に基づいて偏見のまなざしを向けられる人たちもいる。それにもかかわらず，こうした非生物学的属性に基づいた偏見は異民族や女性に対する偏見研究に埋もれ，積極的に検討の対象とされてこなかった。こうした問題点を乗り越えようと，近年，民族性や性別以外の属性に基づく偏見について，その生成過程の解明を試みる研究が行われるようになった。

第 2 章 古典的偏見と現代的偏見

近年，偏見には，ふたつの種類があることが知られるようになった（Edlund & Heider, 2008;

Gaertner & Dovidio, 2005)。ひとつは古典的偏見であり，これは民族性や性別などの生物学的属性に基づいて，彼らに明確な敵意を含んだ偏見を向けるものである（Edlund & Heider, 2008; Gaertner & Dovidio, 2005)。そして，もうひとつが，こうした古典的偏見の枠組みに当てはまらない現代的偏見と呼ばれるものである（Edlund & Heider, 2008)。現代的偏見では，その原因となる属性が，生活習慣やライフ・スタイルなどの個人の選択に基づく制御可能なものであることから，それらは制御可能型偏見と呼ぶことができる。このタイプの偏見のうち，肥満，同性愛，薬物依存，独身，貧困に基づく偏見は主にアメリカにおいて検討されてきた。

古典的偏見では，その原因となる民族性や性別といった属性が個人には変更不能なものであることから，人々はそうした属性を理由として他者に偏見を抱くことを躊躇する。これに対して，現代的偏見では，その原因となっている属性が制御可能なものであることから，それらの属性を持つ責任は個人へと帰属され，古典的偏見に比べると社会的に容認されやすい（Crandall, 1994)。しかし，生活習慣やライフ・スタイルの変更は必ずしも容易ではない。また，正当な人物評価とはその個人が持っている特徴や性質に基づいて決定されるべきものであることからすると，集団的な特徴や性質に基づいて個人を評価すること（偏見）は，それが生物学的属性に基づくものであろうと，生活習慣やライフ・スタイルなどの社会的な属性に基づくものであろうと，やはり合理性を欠いた判断と言わざるを得ない。このように，現代的偏見も不合理で，これに基づく処遇は不当な差別となる恐れが大きいことから，現代的偏見もまた看過できない問題であり，これを是正することは現代社会の課題の一つであると考えられる。したがって，現代的偏見の生成メカニズムを解明することは，偏見に関する学術的知見を提供するだけでなく，公正で平等な社会の構築にも貢献するものと思われる。

肥満者，独身者，喫煙者など，非生物学的属性に基づく偏見は数多く存在するが，それらの生成過程に共通性が見られるのであれば，そして，それが文化を超えて見られるものであれば，その心理過程は人間の基本的心理に根差しているものであると言えるであろう。そこで，本論文では，独身者，喫煙者に対する偏見を取り上げ，それが日本人において見られることを明らかにすることで，現代的偏見の生成を促進する共通的な心理過程を解明しようと試みた。

第 3 章 現代的偏見に関する実証的検討：喫煙者に対する偏見と差別

第 3 章では，喫煙者に対する偏見について実証的検討を行った。喫煙は基本的に個人の嗜好に基づく生活習慣であるため，喫煙者本人がその不健康な習慣を止めさえすれば，偏見の対象から今すぐに抜け出すことが可能とみられがちである。それゆえ，喫煙者は容易に偏見の対象となり，周囲からの差別行動を誘発しやすいと考えられる。こうした性質から，喫煙者偏見は現代的偏見のひとつであるとともに，偏見の生成過程を明らかにする上では重要な現象である。

研究 1 では，喫煙者に対するステレオタイプに基づいて，日本の学生たちが彼らに対して偏見を抱くのかどうかについて実験的研究を試みた。喫煙者は欠課や休憩が多く（Lecker, 2009），たばこの投げ捨てなどによってマナーも悪い（大原・大塚, 2010）といった否定的なイメージを抱かれていることから，こうしたイメージが喫煙者集団全体に敷衍され，個々の喫煙者に対する偏見を生み出すと予測した。具体的には，喫煙者が非喫煙者よりも，落ち着きがなく，不真面目で，知的ではないと評価されると仮説を立てた。また，喫煙習慣を制御可能とみなす人々ほど喫煙者を不健康な喫煙習慣をやめることのできない人物とみなし，彼らに対する偏見を強めると仮説を立て，この点についても検討を行った。研究 1 では，55 名の日本人大学生を対象に実験を行った。実験の結果，参加者は喫煙者を非喫煙者と比較して，落ち着きがなく，不真面目で，知的ではないと評価した。なお，社交性に関しては，喫煙者の社交性が非喫煙者のそれよりも高く評定される傾向が確認された。また，制御可能性認知の調整効果も認められた。喫煙を制御可能とみなす参加者は喫煙者を非喫煙者より不真面目と評定したが，喫煙の制御可能性を低く認知する参加者では真面目さの評定に違いが見られなかった。

研究 2 では，喫煙者に対する差別が喫煙者偏見によって媒介されると仮説を立て，採用場面と隣人から金銭の貸借を求められる場面で，喫煙者と非喫煙者に対する人々の対応に差があるかどうか検討した。96 名を対象とした実験の結果，喫煙者は外向性を除く残り 4 つの次元，すなわち，情緒安定性，誠実性，協調性，開放性（知性）に関して，そうしたパーソナリティが低く評定された。また，参加者は喫煙者に対して偏見を抱くだけでなく，彼らに対する差別意図を示した。参加者は喫煙者の採用に消極的であっただけでなく，隣人である喫煙者からの金銭貸与依頼に対しても消極的な態度を示した。そして，そうした消極的な態度が喫煙者のパーソナリティに対する否定的評価によって媒介されていること

も明らかとなった。

研究 1 と研究 2 を通して，喫煙者は外向性や社交性以外のパーソナリティにおいて非喫煙者よりも否定的に評価されたが，これは落着きがあるなど喫煙者が肯定的に評価されることを見出した McKennell & Bynner（1969）の知見とは矛盾するものであった。この矛盾は喫煙を取り巻く時代の変化によるものであろうと考えられる。McKennell & Bynner（1969）が研究を実施した 40 年前と異なり，現代社会では喫煙行為に対する風当たりが強い。健康主義的な風潮が高まる中で，喫煙行為は喫煙者自身だけでなく周りにいる人の健康にも有害な影響を及ぼしかねない生活習慣と認識されている（Lecker, 2009）。それゆえ，喫煙者は人々から不健康で他者の迷惑を顧みない生活習慣を維持し続ける人物として否定的印象を抱かれるようになったと考えられる。また，喫煙者に対するそうした否定的印象が彼らに対する差別的意図を強めたものと解釈される。

本研究の知見から，喫煙習慣などの非生物学的属性に基づく偏見は，その原因となっている属性を制御可能とみなす認知によって強められ（研究 1），それが差別行動を生み出す心理的基盤となっていることが明らかとなった（研究 2）。しかし，その心理過程に関してはまだ明らかにされていない点も少なくない。現代的偏見はその原因となる非生物学的属性が制御可能と知覚されるために生成されると考えられてきたが（Crandall, 1994; Edlund & Heider, 2008），研究 1 で示された通り，制御可能性認知の調整効果は喫煙者の一部のパーソナリティ特性に対する評価にしか見られなかった。これは喫煙者偏見の生成過程には制御可能性認知以外の要因も介在していることを示唆するものである。そこで，第 4 章では，独身者に対する偏見を取り上げ，制御可能性認知とともにこれ以外の要因の関与も検討することとした。

第 4 章 現代的偏見に関する実証的検討：シングリズム

第 4 章では，独身者に対する偏見，および，彼らに対する偏見を生み出す心理過程について検討した。婚姻状況は生得的に決定される属性ではないため，独身者に対する偏見（シングリズム）は，現代的偏見のひとつである制御可能型偏見であると考えられる。欧米の研究者たちも一貫して，人々が独身者に対して否定的な偏見を抱くことを明らかにしてきた（Greitemeyer, 2009; Morris et al., 2008）。しかし，日本でも同様に独身者に対して偏見や差別が見られるのかどうかは定かではない。そこで，研究 3 では，日本人が非シングルと比

較してシングルのパーソナリティを否定的に評価するかどうか検討を行った。日本人学生74 名を対象に行われた実験の結果，シングルの人々は非シングルの人々よりも，ビッグファイブ特性の中で開放性をのぞく，外向性，誠実性，協調性，情緒安定性のすべての次元において低く評定された。この結果から，欧米同様，日本においても，シングリズムが抱かれていることが示唆された。

喫煙者偏見同様，シングリズムにおいても，制御可能性認知がこれを調整することが予想される。しかし，シングリズムにおいては，これ以外の心理的要因の影響も考慮する必要がある。婚姻状況は制御可能な属性ではあるものの，必ずしも容易というわけではない。独身から脱するためには結婚しなければならないが，配偶者選択は長年連れ添うことになるパートナーを決めるものであり，相手を見極めたうえでの慎重な判断が求められる。また，結婚するためにはパートナーから配偶者として選択される必要もある。これらのことからすると，婚姻状況としての独身は自分の能力や意志だけでは解消できない面もあるように思われる。肥満や喫煙習慣もその制御に強い意志が求められるという点で制御困難さを抱えているが，第三者の意思に依存する婚姻状況はさらに制御困難な属性であるとも言える。もしも，シングリズムにおいて制御可能性認知がそれほど強くないと仮定するなら，シングリズムの生成にはこれ以外にそれを促進する心理的要因が存在すると考えざるを得ない。そうした要因として，本論文では結婚規範と結婚願望信念を仮定し，研究 4 においてその調整効果を検討した。

研究 4 では，幅広い年齢層の日本人を対象に調査を行い，独身者に対する偏見がすべての年齢層に見られることを明らかにするとともに，独身者に対する偏見の生成を促進する 3 つの調整要因の効果を検討した。具体的には，個人の努力次第で結婚できるとみなす認知，結婚をすべきものと規範的にみなす認知，独身者も本当は結婚したがっているとみなす他者の結婚願望に対する推測的認知で，これらが強い人ほど独身者に対する偏見が強いとの仮説を立てた。20 代-60 代の日本人 454 名を対象とした調査の結果，すべての年齢層の参加者が既婚者と比較して独身者の外向性，協調性，誠実性，開放性，情緒安定性を低く評定していた。また，結婚を制御可能とみなす人々，結婚を規範的にみなす人々，独身者も本当は結婚したがっているとみなす人々が，既婚者と比較して独身者を否定的に評価することも確認された。また，独身者の誠実性の評定においては，制御可能性の認知が有意な効果を示さなかったにも関わらず，結婚規範と結婚願望に関する認知がそれぞれ有意な効果を発揮し，それらが強い人ほど独身者に対する偏見を強めていた。これらのことから，シ

ングリズムにおいては，人々が制御可能性認知よりも結婚規範や結婚願望信念に基づいて偏見を生成していた可能性が示唆された。

研究 5 は，制御可能性認知とシングリズムの因果関係を明らかにするために行われた。本論文では，制御可能性の認知が偏見の生成を促進すると仮定しているが，これとは逆の因果関係を仮定する研究者もいる（Crandall & Eshleman, 2003）。そこで，研究 5 では，独身者に対する偏見を測定する前に，制御可能性認知の測定を行い，制御可能性認知の高低によって独身者に対する偏見に違いが見られるのか検討を行った。日本人学生 51 名を対象とした調査の結果，結婚を制御可能とみなす人々は不能とみなす人々と比較して，独身者に対して強い偏見を示すことが明らかになった。これは本論文が仮定する制御可能性認知と偏見生成の因果関係の妥当性を支持するものであったと言える。

第 5 章　総合考察

本章では，第 1 節において，偏見の生成過程におけるこれまでの知見を振り返り，現代的偏見が生成されやすい偏見であることを説明し，これを研究対象とすることが偏見の生成過程の解明に貢献できるものであることを論じた。

第 2 節では，日本人を対象とした本論文の研究から，喫煙者（研究 1 と研究 2）や独身者（研究 3 と研究 4）への偏見が認められたことを示した。これらの結果は，欧米の研究によって見出された知見と一致するものでもあったことから，喫煙者に対する偏見とシングリズムがそれぞれ文化的境界を超えて存在するものであることが示唆された。文化面では多くの違いを持ちながらも，日本と欧米諸国において，喫煙者偏見が共通に見出されたのは，両者とも健康志向の高まりという近年の社会的関心が共通している所為と思われる。近年，日本においても，欧米においても，喫煙率は低下の一途をたどっているが，この背景には，タバコを吸ったことがないという人が増えてきたことに加えて，禁煙を果たした喫煙経験者の存在も貢献していることであろう。禁煙を達成する人が増えれば増えるほど，喫煙習慣を個人の努力や意志によってやめることができるものであるという認識も強まると考えられる。喫煙・禁煙は個人の意思次第であるという社会的認識のもとでは，喫煙者は不健康な生活習慣をやめることのできない怠惰な人物か，もしくは，社会の健康志向を無視する頑迷な人物とみなされるであろう。人々がどちらのタイプの喫煙者を想起したにせよ，

喫煙者の人柄は否定的に評価されることであろう。こうした認知によって喫煙者に対する偏見が文化的な枠を超えて確認されたものと考えられる。

独身者に対する偏見においても文化的境界を超えた一貫性が見られた。こうした結果から，シングリズムを生み出す心的メカニズムについても，日本，アメリカ，ドイツといった国々で共有されたものがあることが示唆される。喫煙者偏見の原因が喫煙習慣を好ましくないとする社会的認識にあるとすれば，シングリズムも同様に，独身を好ましくないものとみなす認識が社会的に優勢であるがゆえに生じていると考えられる。そうした認識を支えているのは結婚を当然のものとする人々の信念であろう。結婚するもしないも個人の自由であるという意見に賛成する者が増えているものの，内閣府（2011）が，日本人だけでなく，アメリカ人，フランス人，韓国人なども対象者とした国際調査では，文化を問わず，20-49 歳の人々の半数以上が法的既婚もしくは事実婚状態にあることを明らかにしている（内閣府, 2011）。既婚者がいずれの社会においても圧倒的多数派であるが，彼らは結婚やカップリングを人間にとっての自然の営みであるとみなしているであろう。また，独身者の 8 割以上が将来的な結婚を望んでいることから（国立社会保障・人口問題研究所, 2011），結婚そのものを拒否し，生涯独身を貫こうとする者は少数派であり，独身者の間でも結婚をすべきものとして当然視する認識が共有されているものと考えられる。こうした認識が，独身者であり続ける個人を，配偶者やパートナーとして選択されないようなパーソナリティ上の問題を抱えた人物とみなす反応を生み出しているものと推察される。

また，第 3 節では，喫煙者に対する偏見においても，独身者に対する偏見であるシングリズムにおいても，制御可能性認知の調整効果が認められたことから，現代的偏見を生み出す心理過程において制御可能性認知が重要な働きを担っていると結論付けた。しかし，喫煙者に対する偏見において，制御可能性の認知による調整効果が一部の従属変数にしか認められなかったことから，これとは別に，各偏見にはそれぞれに特有の調整要因が存在する可能性が推測された。そこで，研究 4 では，シングリズムの生成を規定するそうした独自の要因として，結婚規範と結婚願望信念を取り上げ，それらの調整効果の検討を試みた。その結果，結婚を規範的に捉える人や他者の結婚願望を強く認知した人は独身者を既婚者よりも否定的に評価した。

偏見とは他者に対する不当な判断であり（Allport, 1954），どんな偏見であれ，それを通して他者を判断することは合理的ではない。そのことを人々は十分承知しながらも，しばしば偏見に陥ってしまう。このことは，人々に偏見を抱くように促す心理過程が備わってい

ることを示唆するものであるが，それがここで論じた調整要因であると考えられる。それゆえ，偏見の生成過程の全容を解明するためにも制御可能性認知以外のそれらの調整要因についても考慮していくことが重要であろう。

偏見は長らく研究されてきたテーマでもあるが，偏見は様々な心理学的な要因が複雑に絡み合って生じる現象であり，その生成過程についての検討は今もなお続いている。その複雑な生成過程を明らかにするためには，偏見研究者が協力して，多様な観点からの知見を蓄積することが不可欠である。本研究の知見もまた，そうした偏見生成過程の解明に貢献したものと考えられる。